



議会図書室からのお知らせ



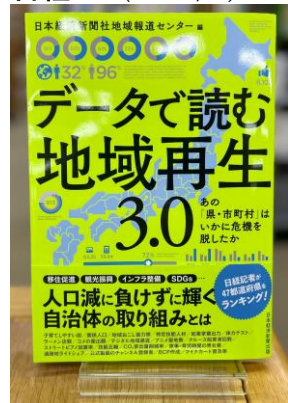
本のタイトルには、出版社の本の紹介のリンクが貼ってあります。出版社での紹介がないものは貼っていません。

今月の新着図書
R8年4月（一般用）

『データで読む地域再生3.0』

～あの「県・市町村」はいかに危機を脱したか』

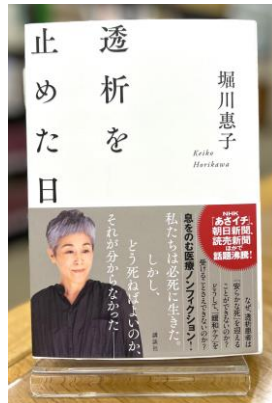
日本経済新聞社地域報道センター【編】/日経BP (2026/1)



アルバイト・パートの時給、家事・育児時間の男女差、コメの産出額などの項目別に47都道府県をランキングし、各自治体が行う独自の取り組みを取材。地域再生のヒントが詰まったシリーズ最新刊。

『透析を止めた日』

堀川 恵子【著】/講談社 (2024/11)



なぜ、透析患者は「安らかな死」を迎えることができないのか？ またなぜ「緩和ケア」を受けることさえできないのか？ 長期間の透析、腎移植、再透析の末、透析を止めた夫を看取った著者による、医療ノンフィクション。

『Z家族』

～データが示す「若者と親」の近すぎる関係』

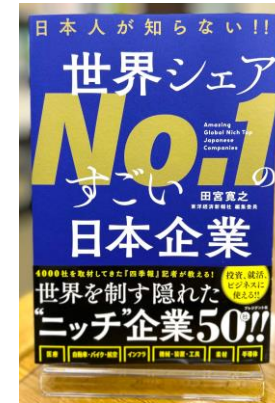
博報堂生活総合研究所【著】/光文社 (2025/9)



Z世代は恋人より母親といたい？ 博報堂のシンクタンクが30年前と同じ設計で実施した「若者調査」を元に、Z世代とその親世代を比較分析。進化した親たち＝「メンターペアレンツ」の実態に迫る。

『日本人が知らない！！ 世界シェアNo.1のすごい日本企業』

田宮 寛之【著】/プレジデント社 (2025/11)



「四季報」などの記者・編集委員として4000社以上の企業を取材してきた企業分析のプロが、小規模なマーケットながらも圧倒的な世界シェアを誇る国内企業を紹介。日本が誇る「隠れた世界シェアナンバーワン企業」が分かる！

『外国人かAIか』

～「人手不足」ニッポンの間違えられない選択』

荒木 秀之【著】/産経新聞出版 (2025/12)



2050年、労働者は今より1400万人も減少すると予測されており、人手不足対策こそ究極の成長戦略だと本書は語る。人手不足という国難をチャンスに変える「省力化戦略」とは何か？ 逆転の発想に満ちた提言の書。

『関係人口の時代』

～「観光以上、定住未満」で地域とつながる』

田中 輝美【著】/中央公論新社 (2025/8)



政府は地方創生の切り札として、「関係人口1000万人の創出」を目標に掲げた。関係人口増加で都市と地方はどのように変わり、個人のライフスタイルにどう影響するのか？ 全国の豊富な事例から考える。

『農業は最強の資産形成である』

～一生“食べる”ビジネスモデルの教科書』

田中 康晃【著】/東洋経済新報社 (2025/9)



農業塾の先生である著者が、経験ゼロでも働きながら無理なく続けられる農業の知識・技能を解説。農業を始めることで、小さくても確実に生活を豊かにできるビジネスモデルを提案する。

『3.11復興』

～ふるさとの記憶を遺す希望の文化財』

山田 菜の花【著】/淡交社 (2026/2)



福島県広野町の復興住宅建設予定地で見つけた遺跡。命も遺跡も守りたいと苦悩し、ぶつかり合い、被災地が見いだした答えとは？ 熱い感動と多くの問題提起が胸を打つ、災害復興ドキュメンタリー。



新着

『ゆるい場をつくる人々
～サードプレイスを生み出す17のストーリー』

石山 恒貴【編著】秋田志保・大川朝子 他【著】
/学芸出版社 (2024/9)



出入り自由、フラットな関係、楽しいから参加する。そんな「強制されない自発性＝ゆるさ」が、地域に、人に必要とされている。
コミュニティ農園・シェア本屋・女性やシニアの仕事場などのサードプレイスを紹介。

『僕たちのサードプレイス
～学校のなかに「居場所」をつくる』

宮田 貴子【著】/藤原書店 (2025/3)



ベッドや段ボールハウスがある、横浜市の小学校特別支援教室「たんぼぼ」。その支援教室において著者は、教室に入れなかった子どもたちの体と心に向き合ってきた。安心して自分でいられる居場所づくりの足跡を探る。

『ぼっちのままで居場所を見つける
～孤独許容社会へ』

河野 真太郎【著】/筑摩書房 (2024/10)



孤独を救うのは個人のつながりだけなのか？
英文学の名著から映画・漫画までを読み解き、「幸福な孤独のある社会」を想像する新しいカルチャー批評。
社会に息苦しさを感ずる人々が排除されない社会へ。

『不登校の子どもとフリースクール
～持続可能な居場所づくりのために』

武井 哲郎・矢野 良晃 他【編著】/晃洋書房 (2022/10)



民間フリースクールが、子どもの最善の利益を守りながら運営を続けるには？
フリースクールの運営を手がける「実践家」とフリースクールに関心を寄せる「研究者」が共同で執筆。事業継承の葛藤や現場の苦悩とは？



『増補 転落の歴史に何を見るか』



著者：齋藤健/筑摩書房 (2011年4月)



紹介者：金沢 充隆 委員
つる舞う・藤岡市・多野郡選出・2期

本書は、日露戦争からノモンハン事件までの34年間の日本の歴史を振り返り、日本の自己改革の失敗やその教訓を組織論の視点から分析したものです。

著者は組織が自己改革力を失う原因として、「合理性より仲間意識の優先」、「日本的集団主義とボス支配」、「異分子の排除や独創性の軽視」、「横行するタテ割り」などをあげています。いずれも、行政や企業など現代の組織文化にも通底するテーマであり、日本軍の意思決定や指導者層の変質などを事例にした克明な分析をもとに多くの教訓を示しています。

同じく日本軍の敗因を組織論的に分析した著書としては「失敗の本質」が有名ですが、こちらもおすすめの一冊です。

次号では、大林 裕子 委員長におすすめしていただきます！

